

喫煙、飲酒、緑茶摂取と食道がん発症リスクとの関連

Smoking, alcohol drinking, green tea consumption and the risk of esophageal cancer in Japanese men.

2006年 Journal of Epidemiology 発表

喫煙と飲酒で食道がん発症リスクが高まる

食道がんは、日本人男性におけるがん死亡の原因では6番目に多いものです。これまで喫煙と飲酒は食道がんの危険因子とされてきましたが、食道がん全体のうち何%程度がこれらの生活習慣によるものか(人口寄与危険度割合)は分かっていませんでした。また、緑茶が食道がんにどのような影響を及ぼしているのかについても、分かっていませんでした。

そこで、宮城県の住民を対象とする2つのコホート研究における男性のデータから、喫煙習慣、飲酒習慣、緑茶摂取量のそれぞれについて、食道がん発生率との関連を解析しました。

その結果、喫煙しない男性と比べて、1日20本以上喫煙する男性では食道がん発生リスクは5.09倍(95%信頼区間=1.80-14.40)も高くなっていました。同様に、飲酒をしない男性と比べて、毎日飲酒する男性では2.73倍(同=1.55-4.81)に達していました。両習慣とも、有意なリスク上昇を認めました。そして緑茶を飲まない男性と比べて、1日5杯以上緑茶を飲む男性ではリスクが1.67倍(同=0.89-3.16)と上昇しましたが、その差は統計学的に有意ではありませんでした(ただし傾向性は有意)。

食道がんに対する人口寄与危険度割合は、喫煙、飲酒、緑茶のそれぞれで72.0%、48.6%、22.1%でした。

研究のデータについて

ベースライン調査:解析には、宮城県内の2つのコホート研究のデータが使われました。1つめは、宮城県コホートで、1990年6月から8月に宮城県内14町村在住の40-64歳の男女約5万2千人に対して自己記入式アンケートを配布したもので、うち4万7605人から有効回答を得ました。回答率は92%でした。

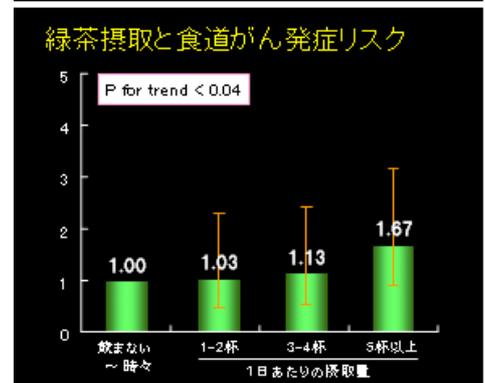
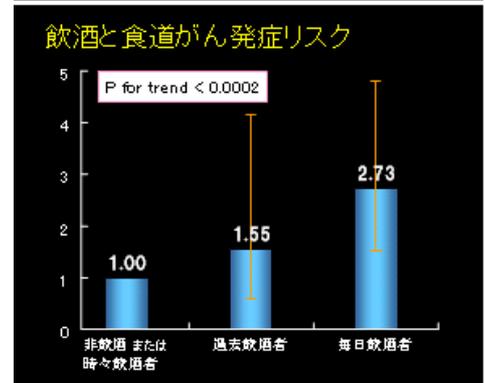
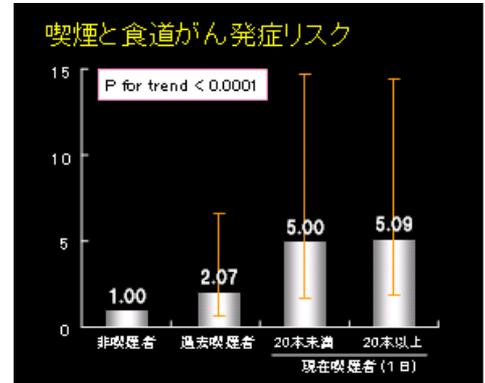
2つめは、三府県コホートで、1984年1月に宮城県内3町村在住の40歳以上の男女約3万3千人を対象に、生活習慣や健康状態などに関する自己記入式アンケートを配布したもので、3万1345人から有効回答を得ました。回答率は94%でした。

追跡調査:ベースライン調査に答えていただいた方のうち、宮城県コホートの集団は1990年6月1日から1997年12月31日まで、三府県コホートの集団は、1984年1月1日から1992年12月31日まで追跡調査を実施しました。

その上で、がんの既往歴のある方、今回の研究に関連する質問への回答に不備のあった方を分析の対象から外しました。また、喫煙や飲酒習慣のある方は女性で少ないことを考慮して、男性だけをデータ解析の対象としました。宮城県コホートでは11,715人が対象となり、うち追跡期間中に40人が食道がんと診断されました。三府県コホートでは9,008人が対象になり、うち追跡期間中に38人が食道がんと診断されました。

喫煙・飲酒・緑茶の摂取について

喫煙については、「喫煙しない」、「過去喫煙」、「喫煙1-19本/日」、「喫煙 \geq 20本/日」の4群に対象者を分類しました。



飲酒については、「飲酒しない又は時々の飲酒」、「過去飲酒」、「毎日の飲酒」の3群に分類しました。この分析では、週5日以上の飲酒を「毎日の飲酒」、週5日以下の飲酒を「時々の飲酒」と定義しました。アルコール飲料の種類や量は考慮しませんでした。

緑茶については、「飲まない」、「1-2杯/日」、「3-4杯/日」、「 ≥ 5 杯/日」の4群に対象者を分類しました。

研究の特徴と限界について

喫煙と飲酒が食道がんの発症に及ぼす影響については既に多くの研究が報告されていますが、本研究では各生活習慣の食道がんに対する人口寄与危険度割合を示した点に特徴があります。その結果、食道がんの72%は喫煙に、49%は飲酒によるものであることが明らかとなり、喫煙対策・過量飲酒対策の重要性が改めて示されました。緑茶摂取が食道がんに及ぼす影響については、これまであまり検討されていませんでした。当教室では従来より、緑茶摂取が発がんに及ぼす影響について検討してきました。

その結果、胃がん、大腸がん、乳がん、前立腺がんでは、緑茶摂取と関連がなかったことを報告しました。今回、食道がんについて、緑茶摂取量の多い者ほど発症リスクが上昇している傾向が観察されました。とは言え、統計学的な有意性も不十分であり、リスクの程度も（喫煙や飲酒ほど）大きいものではありませんでした。緑茶摂取が食道がん発症に及ぼす影響について、断定的な結論を出すには時期尚早と言わざるを得ないでしょう。
